

会 議 議 事 録 (抄)

会 議 名	2025 年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第 1 回インテリア系教育課程編成委員会
開 催 日 時	2025 年 7 月 18 日(金)15 時 40 分～17 時 00 分
会 場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下 1 階 テラホール/9F 902教室
参 加 者	<外部委員:3 名> (順不同・敬称略) 小山 誠之 (株式会社パワープレイス) 島田 祐輔 (apgm デザインアトリエ) 篠塚 泉 (シグニファイジャパン合同会社) <内部委員:2 名> 高山 寿一郎(専門学校東京テクニカルカレッジ インテリア科科長 議長) 村田 涼 (// インテリア科主任 書記)
	<第二部 系別分科会>15:40～17:00 9 階 902教室 1. 議長挨拶と本日の議題 2. 就職・内定状況 3. 資格取得率 4. 海外研修 5. リアルジョブプロジェクト(RJP)の報告 6. 留学生対応と日本語能力、今後の課題 7. 次回予定・閉会の挨拶
討議内容	1. 議長挨拶と本日の議題 高山科長より、今年度の議題についての概要説明、 在籍学生数の増加、特に留学生が多数を占める現状に対する授業・試験での対応とディプロマポリシーとの整合性について意見交換をしたい。 2. 就職・内定状況 (高山) 2024 年度の就職内定状況について報告。9 名中 6 名が就職(リフォーム 2 名、設計・施工・不動産 4 名)、1 名が進学、1 名が就職・進学希望せず、1 名が台湾へ帰国。 2025 年度は 18 名中 13 名が内定を獲得(タクトホーム 5 名、リフォーム関係 5 名、生和コーポレーション 1 名、木下工務店 1 名、設備関係 1 名)、現時点での内定率は 71%で例年並み。 日本人学生 2 名、留学生 3 名が未内定であり、留学生の日本語能力と就職支援が今後の課題。 3. 資格取得率 (高山) 昨年度の色彩検定は 20 名中 21 名が合格し、合格率 95%だったが、2 年生になり合格し 100%の取得率になった。 福祉住環境コーディネーターは母数が少ないものの 55%の取得率。インテリアコーディネーター(IC)は 1 年生の 1 次試験合格率が 10%、2 年生の 1 次試験合格率が 44%、2 次試験を含めた最終合格率は 2 年生で 11%。 次年度以降、留学生の増加により合格率の維持が困難になる可能性があるため、今年度は IC の合格率向上に注力する方針。 4. 海外研修 (高山) コロナ禍を経て海外研修が再開され、昨年 3 月にはバルセロナ、今年 3 月にはパリで実施。インテリア科からは 7 名が参加。 定員が 20 名ですが、今後は枠を増やすことを検討。 今年予定されていたアメリカ研修(SISP)は、留学生の申し込みが過半数を占めたこと、情勢の変化、国籍によるビザ取得の難易度から中止となりました。今後のヨーロッパ研修でも留学生の参加が多くなることが予想されるため、早期の対応が必要であると指摘されました。 5. RJP の報告 (高山) リアルジョブプロジェクト(RJP)では、学生寮のリノベーションが 7 年目を迎え、5 つ目の部屋が完成。今回はモデルルームとして運用するため入居者はしばらく入れず、学生の見学にも利用する予定。 過去に一度施工が行わなかった年度があるため、次で 6 部屋目となる、既に計画が始まっており、今年度もリリカラ(内装メーカー)の協賛が得られる。

6. 留学生対応と日本語能力、今後の課題（高山）

日本人のみでは在籍率を確保しきれないため留学生が増加している現状の説明。しかし、留学生の日本語能力不足が授業や試験に影響を与えていることが課題。

ディプロマポリシーは維持したいものの、留学生への教育方法や評価方法、ひいてはディプロマポリシーそのものについて意見が求められました。

就職には日本語能力試験 N2 以上が求められるものの、読み書きや会話が苦手な学生が多く、履修判定試験でも不合格者が多数出ているとのこと。こうした状況で何を重視して指導すべきか、意見が求められました。

➡質疑応答・意見交換

・日本語能力の重要性

小山委員：以前も確認したが、日本での就職を目指すのであれば、日本語能力は必須であり、努力するしかない。

高山科長：インテリアの勉強と並行して日本語学習も求められる現状は厳しく、はっきり言って無理がある。

島田委員：「なぜ日本でなければならないのか」「何をしたいのか」という本質を洗い出し、そのために日本語能力が不可欠であることを意識させるべき。成績が良くても日本語が不十分では就職後に苦労することを理解させる危機感を持ってもらう必要。

高山科長：企業の人事担当者からも、現場で日本語が話せないと困るという理由で、留学生の採用に消極的な意見が多い。

小山委員：母国語が活かせる環境があればよいが、現実には少なく、あったとしても日本語能力が大前提となる。学校の質を担保するためにも、日本語の基準はこれまで通り維持すべき。

高山科長：オープンキャンパスの段階で日本語ができないと就職は難しいと説明しているが、「全員就職している」という実績を見て安易に入学してしまう学生もいる。これまでは個人の努力で何とかこなしていたが、人数が増えたことで問題が顕在化してきた。

高山科長：日本語学習は個人に任せるとして、インテリア建築の教え方として就職のために不可欠な重点は何か。会話が苦手でも図面が書けるだけでも仕事につながるのではないか。

小山委員・篠塚委員：どんな仕事も一人では行わないため、顧客との会話は難しいにしても、図面の確認やチーム内での指示・協業には日本語能力が不可欠であり、コミュニケーション能力がないと困る。図面が書けるだけでは厳しい。実際に社内に中国出身者がいたが、N1 レベルの日本語能力を持っていた。

島田委員：事前資料にあるような日本語能力レベルごとの機会やリスクを意識させることが重要。日本語ができるほど選択肢が広がり、N3 以下では帰国となってしまうような現状と N1 レベルとの大きな差を理解させるべき。

篠塚委員：日本で働きたいなら日本語は必須。他の言語が話せても、日本語が前提になれば日本で働くことはできない。

小山委員：例えば英語が話せて外資系企業に就職する場合でも、社内公用語が英語だとしても、授業が英語で行われるわけではない。

小山委員：RJP の時間に無料で日本語を教えているのはよいが。日本語が苦手な学生向けに、3年制のカリキュラムのような形で別のプログラムを組むのはどうか。

村田：専門課程と並行して日本語学習を進めるのは難しい。本科に入るには日本語レベルが不足している学生向けに、1 年制の BE 科という学科があるが、定員 80 名がいつも満員。拡充ができれば、日本語能力不足による授業・学生の質の低下を防ぐため、BE 科で 1 年学んだ後に専門課程に進む「1+2」のプログラムを広く導入するのが良いかもしれない。

小山委員：経済的に余裕のある学生が多いのであれば、日本に長く滞在できることはプラス要素となる。

島田委員：BE 科で多様な分野を学び、専門知識を身につけることも重要。BE 科での交流が、将来的な多分野でのコラボレーションにつながる可能性もある。

高山科長：現状、自動車系への入学希望者が大半で、自動車の入学試験に落ちて BE 科に入学・在籍している学生が多い。専門分野の出張授業を経てインテリア科に入学する学生もいるが、4 コマある出張授業の半分が進路決定後の授業となっており、もったいない。

白井校長：過去には IT 系に進みたいが分野の詳細が分からず、BE 科に入って見極め、自信を持って専門課程に進学した学生もいる。TTC の BE 科のような例を模倣して、同様の予備科を設立する専門学校も現れている。BE 科自体は定員を増やすことは可能。通信制高校の卒業生などを対象とした日本人向けの BE 科も検討したい。退学率を下げる目的で午前中のみのプレスクールのような、基礎を固める準備期間としての BE 科も考えている。

島田委員：通信制の学生もそうだが、留学生の日本語能力の問題など、定員調整や拡充ができれば、留学生の増加や学力低下の問題をディプロマポリシー変更せずに解決できる可能性がある。学科内だけで解決するのは難しいだろう。現状「日本語を頑張れ」としか言えないが、BE 科という特色が解決策になりうる。また、留学生だけでなく日本人学生にも理解力の問題がある。実習科目は個別指導がしやすいため運営しやすいが、座学は難しいかもしれない。

篠塚委員：特に専門性の高い座学の授業は、全員に理解させるためには全体のレベルを下げざるを得ない。

島田委員：資格試験の授業とかはどこまで理解できていますか

高山科長：今年の色検定は結果が昨日出ており、合格率は昨年の 95% から 53% まで低下した。留学生は 3 名しか合格できていない。僅かに点数が足りなかったという学生もいるが、日本語能力不足と一部勉強不足を感じる。色検定は冬期もあるため、再受験を促す。

島田委員：「断面図を書きなさい」という設問を読み取れない学生が、日本人にもいる。断面と指示しているのに立面を書いてしまうなど、設問の意図を読み取れなかったり、授業中に話を聞いているようで聞いていなかったり、ケアレスミスや早とちりが多く、頷いていても理解していない学生が多い。提出条件や注意事項のアナウンスは以前より丁寧に行っているが、ミスや質問は増えている。注意力というよりも、想像力・考える力というものがなくなっているように感じ、そういう部分も指導していきたい。

7. 4 期制に関して（高山）

従来の 5 期制から 4 期制への移行について説明がありました。夏休みが 2 期の間に入る新しい構成になります。次年度 2 年生は従来の 5 期のまま、4 期制運営の時間枠に合わせて授業を行う必要があります。

長期休暇をまたいでテストを行う学校は実際に存在するのか、という疑問が呈されました。

島田委員：大学では 7 月後半に前期試験を行い、9 月半ば頃から後期が開始するため、長期休暇をまたぐことはない。大学では GW や祝日も授業を行うことが多く、夏季などの長期休暇を確保するためにこのような形式になっていることが多い。留学や教員の研究活動に充てられている。2 期の間に夏休みを入れるくらいなら、夏休み前に授業を詰め込み、8 月頭までを 2 期とし、夏季休暇後、9 月半ばから 3 期を開始する方が良いのではないかな。

村田：学生にとってはリセット感があり、学習効率が悪くなるため、現状のままだと実質的には 2 期と 2.5 期のような運営をするしかない。テストも夏休み前に実施しないと忘れてしまうなど、運営上の課題もある。

8. 次回予定・閉会の挨拶

高山科長：次回委員会は12月4日木曜日に開催予定。